

付箋を用いた授業整理会の方法について

金沢大学附属高等学校 渡會 兼也

名古屋市立供米田中学校 長尾枝里子

東京大学大学院総合文化研究科 酒井 佑士

(概要) 2011年9月1日から9月28日までに行われた教育実習での授業整理会の方法について報告する。今回我々が行った授業整理会は、ブレーストーミング法やKJ法の考え方を部分的に取り入れたものである。この方法は、特に多くの実習生を抱える大学附属学校での授業整理会において実習の効率を高めると思われる。本稿では、授業整理会の方法と利点・欠点、その効果などを議論したい。

キーワード：教育実習 授業整理会

1. はじめに

教育実習において、教育実習生（以下、実習生と略す）が行った授業後には指導教諭の指導の元で授業の整理会¹が行われる。整理会では該当授業における授業者の反省や指導教諭による指摘・アドバイス、あるいは実習生が複数いる場合には、実習生の立場からの感想・意見などの情報が交換される。授業者はそれらを参考にして次の授業づくりに役立て、指導教諭はそれらを元に評価を行うというシステムになっている（どの学校も大きな違いはないと思われる）[1,2,3]。

実際のところ、実習中の実習生の指導は指導教諭に一任されており、授業整理会の方法も様々である。そのため、整理会での反省を実習生が生かされず、なかなか成長できない（あるいは、成長を感じられない）場合がある。坂田らは実習生が教育実習中に感じるストレスについて報告しており、ストレスの一因として、実習先の教員からのフィードバック不足が挙げられている[4]。もし、整理会の方法を変えることで、指導教員からのフィードバックを明確にできれば、実習生の成長だけでなく、ストレスの

軽減になる可能性がある。

整理会の方法論については系統的な取り組みや研究は現在まであまり報告されていない。想像するに、毎年実習生を受け入れている学校は大学の附属学校等の一部の学校であり、そこに居る教員はすでに個々のノウハウを持っているため、指導の方法論について情報を共有する必要性を感じていないのではないだろうか。

実習生を受け入れる学校にとっては普段の授業を実習生に任せるリスクがあるため、できる限り早く実習生の授業力を向上させたい。そのためには、実習生が整理会で出た反省点を次の授業で速やかに改善できるような指導が必要である。特に、本校のような大学の附属学校では、毎年多くの実習生を受け入れるため、前の授業者の反省や課題を次の授業者が活かすことを期待している。ゆえに、整理会では『指導教員の指導』や『追加情報の整理』、『改善点の明確化』、『情報の共有』が重要である。

渡會は2010年にKJ法[5]による授業整理について報告し、一定の効果があるという実感を得ている[6]（ただ、当時は実習生間での情報共有に主眼を置いていた）。今回は付箋を用いた新たな授業整理会

¹合評会、反省会、検討会、批評会など、様々な言い方がある。

を考えたので、その取り組みを紹介したい。すでに実践をされている先生方がいるかも知れず、新規性はないかもしれないが、こういった記録を残しておくことも重要であると筆者は考えている。

2. 付箋による整理会

ここでは整理会の方法を紹介する。2011年は筆者(渡會)の担当する物理で4人の実習生が実習を行った。実習生の1人が授業を行った場合、残りの3人と指導者(渡會)が観察者となる。

観察者は授業者の授業の中で何でも良いので気がついたことをその場で付箋に書き留める(付箋は観察者ごとに色分けしておくとうよい)。付箋は短文(1~2文)で授業者がわかりやすいコメントにまとめておく。授業後の整理会において、付箋を持ち寄り、授業プリントや指導案に貼っていきながら意見を述べていくのである。

整理会の流れは、(1) 授業者の反省(2) 指導教官から全体的な意見(3) 授業者と観察者と指導教官による具体的な指摘と意見交換である。

授業を振り返る際に、実際に授業で使用したプリント、または、指導案の残部を用いて、時系列に授業を振り返り、その都度反省点に対して付箋を貼っていった。似たような意見が出たらその時点で付箋を重ねていくので、指摘が多い箇所が一目瞭然となる。

重要なのは、指導者が(2)で全体的な意見を言うだけでなく、自身もコメントの付箋を貼ることである。ここでのコメントは、授業者だけでなく、観察者の実習生にも伝わるコメントであればなおよい。

3. 整理会による利点・欠点

ここで今回の整理会について実習生が挙げてくれた利点と欠点を紹介したい。

利点

1. 項目別にまとめやすい。まとめたあと見返しや

すい。整理しやすい。

2. 反省点が文章として残る。
3. 誰が書いた意見かがわかる。
4. 視覚的に良い点や改善点が見える。
5. 回を重ねるごとに改善点の改善具合も視覚的にわかる(モチベーションアップにつながる)
6. 同じ意見を出した人が沢山いることがわかりやすい。
7. 授業を聞きながら気になった所を書きやすい。
8. 授業中にとにかく思ったことを書ける(その場で整理しなくて良い)
9. 授業の流れに沿って、その時の意見を出せる。

上記の1~6は授業者にとっての利点であり、7~9は授業を観察した実習生にとっての利点である。整理会の仕方を変えたことでわかりやすく・改善点が明確になったことがわかる。付箋の多く貼られている箇所は自分の授業の弱い所だとわかる。誰のコメントかが、付箋の色で分かるようになっていたので整理会後に見なおしたときに、誰の意見かを思い出すこともできる。授業のどの場面で改善が必要なかが、『視覚的にわかる』ことが重要である。また、4.でも指摘されているように、改善点が視覚的に明らかになることは実習生の次の授業へのモチベーションアップにも繋がる。通常的口頭による整理会では、評価があいまいで実際に実習生の授業力が進歩はしていても、それを実感することが難しいだろう。

また、授業者だけでなく授業を観察する側も、しっかりと見ていなければ整理会で指摘ができないので授業を見る目が厳しくなり、授業観察力が高められる。その場で意見をまとめる必要が無く、整理会で一緒に意見をまとめることができる点も利点であろう。

欠点

1. 付箋を用いると気になったことを詳しく書くス

ペースが狭い。

2. すぐに整理会をしないと、何でこの文章を書いたのか忘れる。
3. テーマ別に分類することが難しい。

欠点は3つ挙げられていた。しかし、1.は付箋の大きさを変えることで対応できる。そもそも、コメントは1文でまとめ、詳細は口頭で説明するというルールにしてあった。2.は1.と関連があり、付箋の大きさによる制限のため生じたことで、まとめた内容を整理会で思い出すのに時間がかかる、というものであった。これは何らかの都合で授業を行った日と整理会を行う日が異なる場合に問題になる。3.は実習初期に行なっていたテーマ別の分類方法について述べたものである。

実習生の授業は整理会によって精査され、反省・改善点が明らかになる。重要なのはその反省を次の授業にフィードバックすることである。今回の方法であれば、授業をした実習生は整理会において付箋の貼られたプリント(図1~4)を見直しながら、次の準備をすれば良いことになる。実際に授業者Aは、実習開始6日後の授業後には多くの改善点が指摘されていた(図1)が、12日目の授業では授業態度についての指摘が大幅に減り、良い点を指摘されることも多くなった(図2)。図1と図2を比較すると、実習生の成長が視覚的にわかる。図3、図4は授業者Bの実習最終日の授業後の整理会の結果である。細かな指摘はまだあるが、授業の態度や進め方等について指摘はほとんどなくなっている。

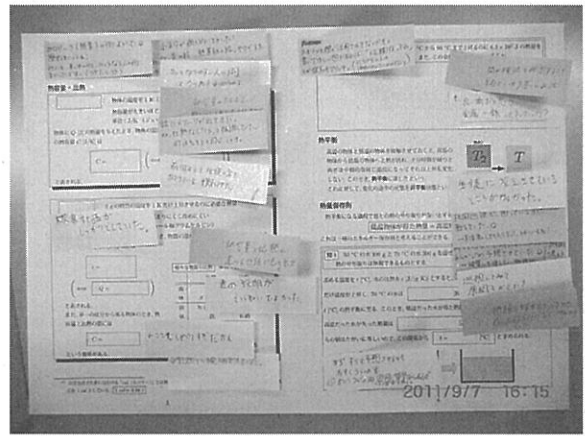


図1 授業者Aの授業プリント1(実習開始後6日目)。ほとんどの箇所コメントが入っている。

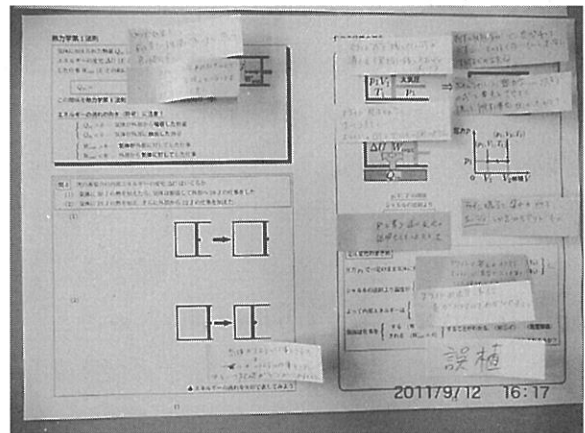


図2 授業者Aの授業プリント2(実習開始後12日目)。6日目と比べるとコメントは洗練され、良い点の指摘も増えている。

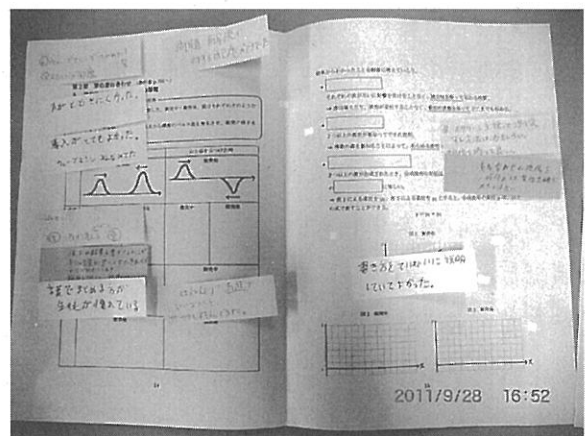


図3 授業者Bの授業プリント①。

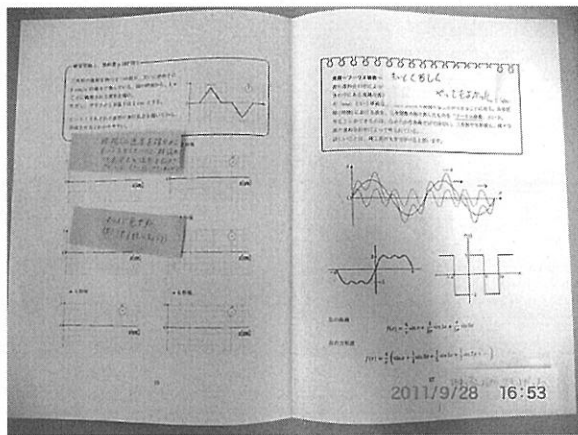


図4 授業者Bの授業プリント②。

4. 議論

筆者（渡會）は教育実習生の指導をして今年で6年目となる。初年度は口頭で指導していたが、実習生の授業が一向に改善されず、授業後に何度も同じ指摘することがあった。その原因の1つは、「指導が明文化されていないこと」ではないかと感じていた。以後、反省会の方法について考え、今回のようなスタイルに落ち着いて来たという経緯がある。やはり、最近の3年間は実習生に言いたいことが伝わっていると同時に、実習生の授業改善もうまく行われているという実感もある。実際に授業を行った実習生だけでなく、授業を見学した実習生も授業を見る目が肥え、自分の授業にフィードバックしよう、という姿勢が見える。これらは実習生のモチベーションの高さに依存するが、今回のやり方は多人数の実習生に対して有効であると感じている。今後、整理会の手法について客観的な評価ができるようにしたいと考えている。

ある実習生は実習の最後の感想に、「反省会が楽しかった。口頭よりも文章として残るほうが嬉しい。口頭だと、自分の目盛になってしまうけど、他人の文章として残る方が嬉しい。」と述べていた。こういった感想が聞けたのは、まさに今回の方法論がその実習生にフィットしたということであろう。

5. まとめ

昔の教育現場は現在よりも少し時間的な余裕があったようだ。その余裕の中でベテラン教員が若手の教員へとノウハウなどを伝えてきたのだと想像する。しかし、時代の変化と共にベテラン教員が多忙化し、若手教員の孤立が起きている。例えば、国立教育政策研究所の平成20年度高等学校理科教員実態調査によれば、「すぐに使える優れた教材情報」や「優れた指導法に関する情報」などの項目で、教員経験年数の少ない教員は経験年数が多い教員よりも大変期待する割合が高い、という結果が出ている[7]。少子化が進めば、学校規模も小さくなり教員の数も減るが、教員の仕事量は変わらず、多忙化が起こる。もはや、口頭によるノウハウの伝承に頼ることはできない時代になっている。ゆえに、現場での教育に関する知識やノウハウを構造化していく必要がある。

小中高の学校教育現場は、新人に即戦力としての力を求める世界である。これはプロ野球で例えるならば、入団したての選手に即1軍で活躍することを強いるのと同じである（しかも、実力・経験が乏しくてもファーム（2軍）のような場所はない。新人教員が学校現場を体験できる機会は、今のところ教育実習しかないのである。ゆえに、附属学校をはじめ、実習生を受け入れた学校は、可能な限り実習生を教員として成長させた形で送り出す責務がある。そのために効果的な実習生指導の在り方も研究していく必要があるのではないだろうか。今後多くの教育実習生指導のノウハウが蓄積されていくことを期待したい。

参考文献

- [1] 「要説 新・教育実習」片山清一，昭和53年，高陸社書店
- [2] 「教育実習の研究」日本教育大学協会 第三部会，学芸図書株式会社，昭和47年

- [3] 「教育実習ハンドブック」教育実習研究会編 酒井書店・育英堂, 1977
- [4] 「教育実習生のストレスに関する一研究」坂田, 音山, 古谷, 1999, 教育心理学研究, 47, p335-345
- [5] 「発想法」川喜田二郎, 中公新書
- [6] 「KJ法による授業整理会の実践」渡會兼也, 高校教育研究 (金沢大学附属高等学校研究紀要), 2010, 第62号, p37-40
- [7] 「平成20年度高等学校理科教員実態調査, 国立教育政策研究所